

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02607

研究課題名(和文)文構造と意味・談話インターフェイス研究—修辞疑問とWH構文をめぐって

研究課題名(英文) A Study of Sentence Structures and Semantic and Discourse Interface: On Rhetorical Question and the Related WH-Constructions

研究代表者

稲田 俊明 (INADA, Toshiaki)

長崎大学・言語教育研究センター・教授

研究者番号：80108258

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：言語の普遍特性と多様性を探求するために、修辞疑問文(RQ)とWH関連構文の統語、意味、談話特性を研究して、下記の点を明らかにした。(1)日・英語のRQには重要な相違があり、日本語では多様なRQが可能である。(2)その相違は、言語運用上の要請を文法化(文末表現とその機能投射など)している日本語タイプとそうでない英語タイプの統語特性(文末表現とその機能投射の有無など)の帰結として説明できる。(3)日・英語の多重WH疑問文のRQ解釈の相違や、他の統語特性(島の効果など)は、上記の観点とインターフェイス条件で説明できる。(4)日・英語以外の通言語的観察においても、このアプローチは妥当である。

研究成果の概要(英文)：To investigate the uniformity and variability of language, we examined the syntactic, semantic and discourse properties of Rhetorical Questions (RQ) and related WH-constructions and clarified the following points. (1) There are significant differences between Japanese and English RQs, and the former allows more options of RQ and the related constructions. (2) The differences of Japanese RQ (JRQ) and English RQ (ERQ) can be reduced to the syntactic properties of the two language types: only the former type has the morph-syntactic marking and/or functional projections to meet the requirements of illocutinary forces including RQ and EQ (Echo-Question). (3) The differences of RQ interpretation in "multiple WH-questions" and "island effects" in JRQ and ERQ can be explained by the above properties and the interface conditions. (4) Cross-linguistic observations of RQs in other languages (Korean, Chinese, German, French, etc.) also indicates that the above approach is tenable.

研究分野：言語学

キーワード：修辞疑問文 インターフェイス 多重WH疑問文

## 1. 研究開始当初の背景

- (1) 修辞疑問の研究は、Sadock (1971、1974) 以来、Han Chung-Hye (1997、2002)、Rohde (2006)、Sprouse (2007)、Caponigro and Sprouse (2007)、Cheung (2008)、Wang (2014)、Oguro (2014)、藤井 (2014、2015) 等、多様なアプローチにより研究されていたが、理論的には十分な成果があがっているとは言えなかった。
- (2) このような基礎的研究が蓄積されてはいたが、言語の普遍特性と多様性を保障する「言語機能」の解明という観点から見ると十分な成果が得られていなかった。
- (3) また、修辞疑問と WH 関連構文の統語的、意味的、談話的特性が、どのように文法インターフェイスの特性の解明に繋がるのかという視点からの研究は、従来のアプローチでは不十分であった。
- (4) 英語の修辞疑問については、部分的に実証的・理論的調査が蓄積されつつあったが、修辞疑問と WH 関連構文の特性を通言語的に調査して、理論的成果をだした研究はこれまでなかった。

## 2. 研究の目的

- (1) 本研究は、言語の普遍的特性と同時に多様性を生み出す言語機能のモデルを探索するために、従来の分析や標準的アプローチの問題点を指摘し、その不備を克服するために探究したものである。
- (2) 生成文法における「言語機能の特性」の解明を目指す近年の言語研究では、言語の特性のうち何が言語固有の文法特性の具現であり、何が認知体系全般の反映なのかを明らかにすることが重要な課題と一つになっている。

## 3. 研究の方法

- (1) 英語と日本語の修辞疑問の特性に関する英語学、言語学関連の文献を詳細に調査して問題点を洗い出した。
- (2) 修辞疑問文と関連構文に関する通言語的調査を、各言語の母語話者を使って行った。

- (3) 研究成果を、研究代表者、分担者でそれぞれ論文にまとめて発表した。
- (4) 関連学会、ワークショップ、招聘講演などにおいて、研究成果を発表した。
- (5) 学会発表のフィードバックや当該分野の研究者のアドバイスを取り入れて、研究成果に更なる改善を行った。

## 4. 研究成果

- (1) 主として英語と日本語の修辞疑問の特性を研究し、修辞疑問文と WH-関連構文の文理解の仕組みがどのように文法化され、各言語の統語構造に如何に組み込まれているか明らかにした。また、日・英語に加えて、通言語的に(多重 WH-疑問文を中心とした)修辞疑問解釈と WH-疑問文の関係を調査して、上記のアプローチの検証を行った。
- (2) 修辞疑問解釈には統語形式に反映されない意味が潜んでいるので、この研究は「発音されない表現の奥に潜む統語特性と意味特性」を探ることに繋がり、結果として人間に備わった言語機能の特性の究明に繋がることを明らかにし、それを示唆する具体的な研究成果を上げた。
- (3) 特に以下の点を明らかにした：

日英語の修辞疑問(RQ)の相違は、言語運用の要請を文法化している日本語タイプとそうでない英語タイプの統語的相違の帰結であることを実証的に示した。

日本語 RQ の統語構造は、日本語の「問返し疑問」(EQ)と同様に、基本的に発話動詞の引用補文の特性を持つ。他方、英語 RQ の統語構造は、英語 EQ と並行的であり、RQ は「純粹疑問」(GQ)の談話解釈である。

日英語の多重 WH-RQ の相違は、WH-句の形態・統語的特性と文中の WH-句の解釈の仕組みが日・英語では異なることによるものである。英語の多重 WH-句に RQ 解釈が許されないのは、in-situ WH を認可する仕組みが英語にはないことによる。他方、日本語の多重 WH-句に RQ 解釈が可能なのは、

WH-句の特性と文末表現とその機能範疇による認可条件との相互作用の帰結である。

日英語のRQは、「感嘆文」(Exc)と類似した特性を持つ。つまりWH-構文は共通の意味特性を持つが、RQとExcのWH-句の変域には、GQとは異なる次のような共通の特性を持つ。また、英語のRQにおけるWH-句の特性は、英語のExcの特性と並行的である(換言すると、RQのWH-句の値は、感嘆文と同様にゼロではない)。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

稲田俊明・今西典子, 「日英語の修辭疑問の特性と統語制約 言語の普遍性と多様性の探索(2)一」, 『長崎大学言語教育研究センター論集』査読有、第5号, 2017, 1-20.

NISHIOKA, Nobuaki “Expressions that Contain Negation,” *Handbook of Japanese Syntax* (Handbooks of Japanese Language and Linguistics), Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa and Hisashi Noda (eds.), Mouton De Gruyter, Berlin/Boston, 査読有, 2017, 635-662.

稲田俊明、今西典子, 「日英語の修辭疑問をめぐって一言語の普遍性と多様性の探索(1)一」, 『長崎大学言語教育研究センター論集』査読有、第4号, 2016, 1-23.

INADA, Shun-ichirou and INOKUMA Sakumi, “On the Acquisition of Locative PPs,” *Linguistic Research* 30, The University of Tokyo, 査読有, 2016, 91-104.

[学会発表](計5件)

稲田俊明 「日・英語の修辭疑問文と統語統制について」福岡言語学会(招聘講演), 2017.

西岡宣明 「主語の位置と否定の作用域のラベリング」福岡言語学会(招聘講演) 2017.

稲田俊明 「日英語の修辭疑問の特性と統語制約について」九州大学言語学研究会第100回記念大会(招聘講演), 2016.

西岡宣明 「日本語の主語と「が」「の」交

替」関西言語学会40回記念大会ワークショップ, 2016.

稲田俊一郎 「構造の再帰性に関する構文論的研究」日本言語学会第151回大会, 2016

[図書](計2件)

稲田俊一郎, 小笠原真司、廣江顕、松元浩一、谷川晋一、徐佩伶、水本豪、團迫雅彦、隈上麻衣、古村由美子、丸山真純、大橋絵理、大谷絵理果、奥田阿子 『外国語の非一常識：ことばの真実と謎を追い求めて』英宝社, 2018, 41-54.

西岡宣明, 福田稔、松瀬憲司、長谷信夫、緒方隆文、橋本美喜男 『ことばを編む』開拓社, 2017, 102-112.

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]  
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

稲田 俊明 (INADA, Toshiaki)  
長崎大学・言語教育研究センター・教授  
研究者番号: 80108258

(2)研究分担者

稲田 俊一郎 (INADA, Shunichirou)  
明治薬科大学・薬学部・講師  
研究者番号: 10725386

(3)研究分担者

今西 典子 (IMANISHI, Noriko)  
文京学院大学・外国語研究科・非常勤講師  
研究者番号： 70111739

(3)研究分担者

西岡 宣明 (NISHIOKA, Nobuaki)  
九州大学・人文科学研究院・教授  
研究者番号： 80198431